

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00726

研究課題名(和文) モンゴル帝国時代の仏像新発見に伴う「草原のシルクロード」の拠点に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Bases of the "Silk Road in the Plains" Associated with the Discovery of Buddha Statues in the Mongol Empire Era

研究代表者

村岡 倫 (Muraoka, Hitoshi)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：30288633

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に、モンゴル高原西部における「草原のシルクロード」の拠点であったハルザン・シレグ遺跡と、高原北部の釈迦院遺跡の発掘調査を含めた研究を進めてきた。

前者は、モンゴル帝国時代の重要な軍事拠点「チンカイ城」に比定され、もっと古い4・5世紀においても交通の要衝であり、さらに17世紀にも機能していたことが明らかとなり、長くモンゴル高原と中央アジアを結ぶ交通路の拠点であることが明らかとなった。

後者については、モンゴル帝国時代初期の遊牧民の仏教信仰を知る重要な手掛かりを得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調査対象としたハルザン・シレグ遺跡は、モンゴル帝国時代のみならず、4、5世紀の古くから、17世紀の新しい時代まで、モンゴル高原から中央アジアを結ぶ交通路の拠点でもあったことを明らかにし、釈迦院遺跡の調査では、これまで知られていなかったモンゴル帝国時代初期の遊牧民の仏教信仰を知る上で、重要な手掛かりを得た。それらが大きな学術的意義である。

これらの遺跡は国内外と問わず、注目度が高く、それらの綿密な調査は学界に寄与するところは大い。また、現在のモンゴル国にとっても、重要な文化遺産となり、国際的な貢献度は高い。

研究成果の概要(英文)： In this research, we have mainly conducted research including excavation surveys of the Harzan Shireg site, which was the base of the "Silk Road of the Grassland" in the western Mongolian plateau, and the Shakain site in the northern plateau.

Harzan Shireg site was identified as an important military base during the Mongol Empire, Chinkai Castle, and was a key transportation hub even in the 4th and 5th centuries. It became clear that it was the base of the transportation route connecting the plateau and Central Asia.

As for Shakain site, we were able to obtain important clues to understand the Buddhist beliefs of nomads in the early days of the Mongol Empire.

研究分野：東洋史学

キーワード：草原のシルクロード モンゴル帝国 仏教 ハルザン・シレグ遺跡 釈迦院遺跡

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の研究代表者および研究分担者たちは、長く日本・モンゴル共同プロジェクトによるモンゴル帝国時代の遺跡の調査に参加してきた。プロジェクトでは、多くの成果を挙げてきたが、その最大の成果は、モンゴル国西部で発見したハルザン・シレグ遺跡が、モンゴル帝国時代の重要な軍事拠点「チンカイ城」の遺跡であることを明らかにしたことである。2016年・2017年の本遺跡の発掘調査では、仏像の一部とそれを安置した寺院の可能性のある建造物を発見した。これは、モンゴルがこの地で働く漢人の信仰を尊重してつくったものと考えられる。ハルザン・シレグの地は、モンゴル高原から中央アジアへ通じる「草原のシルクロード」の要衝であり、民族融合の場でもあったと考えられた。本遺跡の研究をさらに深化させ、その歴史的意義を明らかにする必要があると考えたことが研究開始の背景にあった。

(2)また、このような交通路の要衝は、モンゴル高原各地にもあり、その中から重要な遺跡を選び、さらに綿密に調査し、ハルザン・シレグ遺跡との比較検討が、それらの歴史的意義をさらに明らかになると考えられ、その調査候補としてモンゴル国北部の釈迦院遺跡を考えていた。

2. 研究の目的

(1)本研究では、ハルザン・シレグ遺跡のこれまでの調査を継続し、さらなる本格的な発掘を行ない、遺跡全体の構造を把握し、出土物などの分析、関連文献資料との対象など、総合的な研究を行ない、モンゴル高原と中央アジアを結ぶ交通路の意義、また歴史上、東西を往来する多様な人々がこの地でどのような交流を行っていたのかを解明することを目的とした。

(2)また、比較検討の対象の遺跡として、これまで発掘はされてはいたものの、公式な報告書もなく、全容が明らかとなっていないモンゴル国北部の釈迦院遺跡を選び、本遺跡の発掘調査も行ない、この地を経由したモンゴル高原から北方へ、ロシア草原に向かう交通路の意義の研究も視野に入れることにした。

3. 研究の方法

(1)本研究は、上記のプロジェクトにこれまで参加してメンバーを中心に、ハルザン・シレグ遺跡に関しては、仏像が発見されたモンゴル帝国時代だけでなく、それ以前の時代も視野に入れ、そのため、各時代のモンゴル高原史の研究者に参加の要請をした。モンゴル帝国時代の専門とする村岡倫を研究代表者とし、全体を統括するとともに、チンカイ城に関してはこれまでも多くの研究があり、本研究ではそれらを踏まえ、モンゴル帝国時代のモンゴル高原から中央アジアへの交通路の研究を進める。同じくモンゴル帝国史を専門とする松田孝一を連携研究者とし、特に農耕民や技術者派遣によるチンカイ城の交通・軍事の拠点としての意義を研究する。研究分担者の松川節もモンゴル帝国時代におけるモンゴル語・チベット語文献に見える「草原のシルクロード」の諸相を研究する。

(2)モンゴル帝国以前については、それぞれの時代の専門家が担当する。新しい時代からさかのぼると、まず研究分担者の藤原崇人が、契丹・金時代の当該地域の意義を研究する。唐代並行期の突厥・ウイグル時代の交通路に関しては、研究分担者の鈴木宏節が担当し、前回の科研費の調査で課題として残った、ハルザン・シレグ遺跡が高車時代の遺跡ある可能性と高車と高昌国など中央アジア諸国との関連は、研究分担者の中田裕子が研究を進める。

(3)今回の遺跡の発掘は、モンゴル側の考古学研究者の主導で進めるが、日本側も、研究分担者としてモンゴル考古学の専門家である白石典之を研究分担者とし、モンゴル側研究者との連携も含め、考古学的な見地から研究を行なう。

(4)具体的な日程としては、2018年度から3年間の研究期間において、毎年8月ないしは9月にモンゴル側は2週間~3週間にわたってハルザン・シレグ遺跡あるいは釈迦院遺跡で発掘調査を行ない、日本側はその間、それらの遺跡および周辺地域の巡検調査を行なう。モンゴル側は、毎年、発掘の成果を研究代表者に報告し、それらの成果は、整理した上で、モンゴル国や日本の学会や研究会で報告し、世に還元する。また、一般向けの講座などで積極的に講演し、一般の人たちに知ってもらうことにも力を入れる。

4. 研究成果

(1) 2018年9月には、モンゴル側主導でハルザン・シレグ遺跡の発掘調査を3週間ほど実施し、研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者ら6名が現地を訪れ、遺跡の調査以外にも、新たに発見された「草原のシルクロード」の重要拠点の調査も行なった。また本遺跡から出土採取した木片や骨などの年代測定も行なったところ、モンゴル帝国時代のものが多く、この地が当該時代の軍事拠点「チンカイ城」であることが再確認された。また、チベット文字が書かれた牛の肩甲骨が発見された。占いに使われたと考えられ、解読したところ、チベット仏教のマントラ（真言）であったことがわかった。研究分担者の白石が放射性炭素年代測定にかけた骨が、17世紀のものであることが判明し、この地で長い期間行なわれた東西文化交流の諸相の一端を解明する重要なデータが得られた。

(2) 16年に出土した仏像の一部は、2018年9月に本科研に関連してモンゴル国立歴史博物館で他の出土物と共に展示会を行ない、モンゴル西部現地の博物館に返還寄贈した。展示会には、研究者や一般の人々、報道機関も多く集まり、好評を博した。貴重な文化財が保護され、現地に寄贈されたことは、本研究期間内における大きな意義の一つである。その他、この年は、唐代のトルコ系僕固部の首領、乙突の神道碑の再発見、釈迦院遺跡の予備調査など、「草原のシルクロード」に関連する調査ができた。

(3) 2018年度は、研究代表者の村岡が、名古屋の中日文化センターの一般向けの月1回の講座において、12月から翌2019年3月にかけて、今回の成果について講演し、11月16日の龍谷大学のご命日法要の法話の中でもその意義を紹介し、11月30日の「龍谷大学東洋史学研究会」で研究成果を発表した。12月22日に開催された国際シンポジウム「アジアの仏教ソーシャルワーク」では、調査の成果を写真等で展示するなど、参加者の関心を集めた。研究分担者の中田も、2019年3月の「遼金西夏史研究会」の研究発表で、本研究の調査成果を報告し、他大学、他の研究機関の研究者たちの好評を得た。さらに、村岡は、モンゴル国の多くの方に還元する意味も込めて、2019年5月においても2018年の研究成果をモンゴル国立大学で研究成果を講演した。モンゴルの多くの小学生も集まり、講演内容に関心を持ってもらい、有意義な講演会となった。

(4) 2019年は、ハルザン・シレグ遺跡と並んで、「草原のシルクロード」の重要な拠点と思われる釈迦院遺跡の本格的な発掘調査を行なった。前年同様、発掘はモンゴル側主導で3週間行なわれ、日本側のメンバーによる交通路や銘文・碑文の巡検調査と釈迦院遺跡周辺の調査を行なった。本遺跡は、現存する「釈迦院碑記」の内容から、モンゴル帝国時代に建造されたと考えられてきたが、今回出土した遺物の測定分析の結果、それらはまぎれもなくモンゴル帝国時代のものであり、遺跡の年代が初めて科学的にも証明されたことは、大きな成果であった。

(5) 2019年9月には、18年に発表した研究分担者の中田と研究代表者の村岡による共著論文「アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見と意義」(『東洋史苑』90、2018、1-37)をモンゴル語に翻訳して冊子とし、発刊した。その翻訳、刊行、発刊記念のシンポジウム開催等の費用については本科研より支出させていただいた。シンポジウムにはモンゴル現地の研究者や一般の人々、報道機関も多く集まった。日本でも引き続き、一般への還元も進め、研究代表者は、大阪の朝日カルチャーセンター中之島教室でも定期的に研究成果を講演している。

(6) 2020年度、2021年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、モンゴルへの渡航が不可能になり、国内でも学会や研究会の開催、あるいは研究代表者や研究分担者が集まることが難しくなり、科研費も2年連続で繰り越さざるをなくなった。その間、研究代表者、研究分担者は各自、国内での文献調査、論文執筆に力を入れ、村岡・中田は「モンゴル西部における東西文化交流の拠点」(『国際社会文化研究所紀要』22、2020、pp.93-117)を上梓した。

(7) 2年間の繰り越し後、実質の最終年度となった2022年度には、8月に3年ぶりに釈迦院遺跡の発掘調査がモンゴル側主導で再開され、研究代表者および研究分担者もモンゴルに渡航し、調査に当たった。今回は中央基壇西側部分と院内東方の小型建造物の試掘を行なったことにより、遺跡の構造がかなり明らかとなった。中央基壇西側部分には大量の岩石が埋められており、それらを取り除くと長さ142cm、厚さ7cmの羽目板が出土し、中央基壇は木造で、外側に岩石を埋め込んで補強していることが初めて明らかとなった。また羽目板は基壇西部で途切れており、西側部分にも出入口があったことが判明した。出土遺物から判断すると、本遺跡は長期間にわたって利用されておらず、居住遺跡ではなく、建築当時のハーンであったモンケに捧げられた寺院であったと推測される。

幸いに今年度からも新しく基盤研究(B)の採択をいただいた。これまでの発掘の報告についてはすでにモンゴル側でまとめられているので、新しい科研では、その翻訳と刊行も目指す。また、本遺跡の調査も継続し、建築構造を明確にしたい。さらに、その他の遺跡にも視野を広げ、「草原のシルクロード」の意義を研究する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計33件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 ・ ・ ・	4. 巻 なし
2. 論文標題 2018	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 - 2018	6. 最初と最後の頁 310 - 315
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 ・ ・ ・	4. 巻 なし
2. 論文標題 “ ”	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 - 2019	6. 最初と最後の頁 1 - 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 中田 裕子	4. 巻 第57集
2. 論文標題 唐代の同業者組合『行』とソグド商人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷大学世界仏教文化研究論叢	6. 最初と最後の頁 49 - 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 238号
2. 論文標題 実用と装飾 石人	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 215 - 228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 238号
2. 論文標題 注目される遺跡 突厥・ウイグルの遺跡」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 352 - 365
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村岡倫・中田裕子	4. 巻 第22号
2. 論文標題 モンゴル西部における東西文化交流の拠点 2017年ハルザン・シレグ遺跡調査の報告とその後	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際社会文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 83 - 107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Matsuda	4. 巻 -
2. 論文標題 Comparing the Depictions of the Mongol Courts Created in the Yuan and the Il-Khanate	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The New Approaches to Ilkhanid History, Brill, Leiden	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中田裕子・村岡倫	4. 巻 90号
2. 論文標題 アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見とその意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋史苑	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中田裕子	4. 巻 第57集
2. 論文標題 唐代の同業者組合『行』とソグド商人	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 龍谷大学世界仏教文化研究論叢	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中田裕子	4. 巻 なし
2. 論文標題 唐代的粟特人与“行”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新疆出土文献与丝绸之路 - 旅順博物館建館100周年	6. 最初と最後の頁 631-641
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 709
2. 論文標題 ゴビ沙漠 南北のモンゴルをつなぐ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究月報	6. 最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田孝一	4. 巻 32号
2. 論文標題 史料は待っている	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史懇談	6. 最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松川節	4. 巻 第7巻
2. 論文標題 ヘルレン・パルスホト 城址とチンギス・ハーン嶺北長城に関する覚え書き	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松川節	4. 巻 第6巻
2. 論文標題 チンギス・ハーンの東北(嶺北)長城 その歴史学・考古学的研究の現状と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 25-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsukawa, Takashi	4. 巻 なし
2. 論文標題 New Perspectives on the Historical Evidence and Archaeological Findings from Erdene-Zuu Monastery	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀~17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究 第1期 研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村岡倫	4. 巻 25号
2. 論文標題 モンゴル帝国時代の史料に見える方位の問題 時計回り90度のずれが生じる要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 13、14世紀東アジア史料通信	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村岡倫	4. 巻 第151・152合刊号
2. 論文標題 『元史』食貨志・歳賜と地理志から見るコルゲン・ウルスの変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 龍谷史壇	6. 最初と最後の頁 1-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村岡倫	4. 巻 第61集
2. 論文標題 第二次大谷探検隊のモンゴル調査 クーロンからエルデネ・ゾーまで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 龍谷大学世界仏教文化研究論叢	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 37号
2. 論文標題 2019年度モンゴル国突厥関連遺跡調査筋記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神女大史学	6. 最初と最後の頁 46-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石典之	4. 巻 80-1
2. 論文標題 モンゴル帝国における「焼飯」祭祀	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 69-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石典之	4. 巻 なし
2. 論文標題 モンゴル帝国の祭祀とウマ犠牲	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 馬・車馬・騎馬の考古学	6. 最初と最後の頁 59-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節	4. 巻 なし
2. 論文標題 遊牧帝国の形成と分裂	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論点・東洋史学 アジアアフリカへの問い158	6. 最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木宏節 (著)、晏梓郁 (訳)、胡鴻 (校)	4. 巻 第23輯
2. 論文標題 漠北回鶻汗國的突厥碑銘??希?烏蘇碑北面銘文的再討論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 域外漢籍研究集刊	6. 最初と最後の頁 339-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇人	4. 巻 なし
2. 論文標題 釈迦生身を奉げる女真の王朝 仏教国としての金	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア仏教美術論集 東アジア 南宋・大理・金	6. 最初と最後の頁 515-537
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇人	4. 巻 なし
2. 論文標題 契丹北域のセン塔に関する一試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア仏教美術論集 東アジア 五代・北宋・遼・西夏	6. 最初と最後の頁 507-528
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇人	4. 巻 なし
2. 論文標題 祭山儀にみる契丹の信仰 謁菩薩堂儀の位置づけをめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神仏融合の東アジア史	6. 最初と最後の頁 172-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇人	4. 巻 第37号
2. 論文標題 契丹(遼朝)治下律僧の様態 「律宗」の存在をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国 社会と文化	6. 最初と最後の頁 58-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原崇人	4. 巻 なし
2. 論文標題 宋元時代華北の都市名刹 釈源・洛陽白馬寺を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都市と宗教の東アジア史	6. 最初と最後の頁 185-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田孝一	4. 巻 34号
2. 論文標題 カラコルムを首都とするチンギス・カンの命令の真相を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史懇談	6. 最初と最後の頁 52-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsuda, Koichi	4. 巻 なし
2. 論文標題 Comparing the Depictions of the Mongol Courts Created in the Yuan and the Ilkhanate	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 New Approaches to Ilkhanid History	6. 最初と最後の頁 167-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田孝一 (著)、求芝蓉・汪瑩・馬曉林 (訳)	4. 巻 2022 - 5期
2. 論文標題 印度蘭普爾扎拉図書館蔵《史集》抄本《元朝宮殿図》簡報	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 故宮博物院院刊	6. 最初と最後の頁 62-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石典之	4. 巻 第51号
2. 論文標題 ウグルクチン・ヘテム遺跡の石壘の構築年代をめぐる問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本モンゴル学会紀要	6. 最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松川節・牛根靖裕・古松崇志・小野浩・齊藤茂雄・高井龍・伴真一朗・毛利英介	4. 巻 第51号
2. 論文標題 コズロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡 G110r について - 『大元通制』ウイグル字モンゴル語訳の発見 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本モンゴル学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Takashi MATSUKAWA
2. 発表標題 On the Reconstruction of Replica of Sino-Mongolian Inscription (1347) from Kharakhorum.
3. 学会等名 The International Association for Mongol Studies. Heritage and Culture of the Mongols: Archaeological and Literary Monuments (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Fujiwara Takato
2. 発表標題 The Culture Area of Buddhism in the Khitai Dynasty
3. 学会等名 2019 International Conference "A Look at East Asian History through Transnational Intercourse and Networks" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中田 裕子
2. 発表標題 2019 International Conference "A Look at East Asian History through Transnational Intercourse and Networks"
3. 学会等名 "多元視覚下の伝法律文献研究" 国際学術検討会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村岡倫
2. 発表標題 モンゴル帝国時代の仏教遺跡 モンゴル国の現地調査から
3. 学会等名 2018年度龍谷大学東洋史学研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中田裕子
2. 発表標題 2018年モンゴル現地調査報告 僕固乙突神道碑に関して
3. 学会等名 第19回遼金西夏史研究会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原崇人
2. 発表標題 金元代寺院秩序の一端 絳州白台寺「寺規」碑より
3. 学会等名 関西大学東西学術研究所 東アジア宗教儀礼班 研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村岡倫
2. 発表標題 チンギス・カンの第6子コルゲンとその子孫
3. 学会等名 国際学術会議「チンギス・ハーンの世界とモンゴル研究」(モンゴル国ウランバートル)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田裕子
2. 発表標題 唐代における僕固部族とモンゴル高原における鉄勒諸部の分布
3. 学会等名 国際学術会議「チンギス・ハーンの世界とモンゴル研究」(モンゴル国ウランバートル)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松川節
2. 発表標題 “ ”
3. 学会等名 国際学術会議「チンギス・ハーンの世界とモンゴル研究」(モンゴル国ウランバートル)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田孝一
2. 発表標題 チンギス・カンのカラコルム建設の目的
3. 学会等名 国際学術会議「チンギス・ハーンの世界とモンゴル研究」(モンゴル国ウランバートル、オンライン参加)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村岡倫
2. 発表標題 カラコルム出土漢文碑文に現れるモンケ・ハーンの子孫について
3. 学会等名 「遊牧民の文字碑文の研究：現在と未来」学術会議(モンゴル国ハラホリン)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田裕子
2. 発表標題 興元閣碑文レプリカにおけるデジタルアーカイブの可能性
3. 学会等名 「遊牧民の文字碑文の研究：現在と未来」学術会議（モンゴル国ハラホリン、オンライン参加）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田孝一
2. 発表標題 カラコルムの漢語の碑
3. 学会等名 「遊牧民の文字碑文の研究：現在と未来」学術会議（モンゴル国ハラホリン、オンライン参加）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松田孝一
2. 発表標題 クビライのめざしたこと
3. 学会等名 第三回元朝史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中田裕子
2. 発表標題 匈奴帝国の成立と衰退～和蕃公主からみる漢王朝との国際関係
3. 学会等名 第7回王昭君研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白石典之
2. 発表標題 モンゴル国ゴルバンドブ遺跡1号マウンドの調査
3. 学会等名 第21回北アジア調査研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白石典之
2. 発表標題 モンゴル国ハンザト遺跡の調査
3. 学会等名 2019年度シルクロード研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 ・ , ・	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ,	5. 総ページ数 56
3. 書名 , tyy y y	

1. 著者名 古松崇志・白杵勲・藤原崇人・武田和哉（共編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 335
3. 書名 金・女真の歴史とユーラシア東方	

1. 著者名 藤原崇人（共著）・原田正俊（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 アジアの死と鎮魂・追善	

1. 著者名 村岡倫（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 286
3. 書名 最古の世界地図を読む 『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海	

1. 著者名 小松久夫・松田孝一その他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 413
3. 書名 中央ユーラシア史研究入門	

1. 著者名 Timothy Brook, Koichi Matsuda et al	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Chicago University Press	5. 総ページ数 277
3. 書名 Sacred Mandate	

1. 著者名 古松崇志・臼杵勲・藤原崇人・武田和哉その他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 金・女真の歴史とユーラシア東方	

1. 著者名 白石典之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 280
3. 書名 モンゴル考古学概説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 宏節 (Suzuki Kosetsu) (10609374)	神戸女子大学・文学部・准教授 (34511)	
研究分担者	白石 典之 (Shiraishi Noriyuki) (40262422)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	藤原 崇人 (Fujiwara Takato) (50351250)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	松川 節 (Matsukawa Takashi) (60321064)	大谷大学・社会学部・教授 (34301)	
研究 分 担 者	中田 裕子 (Nakata Yuko) (70598987)	龍谷大学・農学部・准教授 (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関